

〈研究ノート〉

「因幡の手づくりまつり」における発達の視点 —現代の子ども・大学生の教育と地域づくり—

國本真吾

Shingo KUNIMOTO : The Evaluation of "The Inaba Handmade Festival" from the Viewpoint of Development—Education for Modern Children, and University / College Students, and Improvement of Community—

大学の地域貢献が求められる中で、その活動の在り方について吟味されなければならない段階にある。本稿で取り上げた「第11回因幡の手づくりまつり」には、現代の子どもや青年期にある大学生の教育・発達課題に応じるとともに、中心市街地の地域活性化による地域の発展という可能性が、地域のものづくりの催しの中で垣間見られている。それは、「因幡の手づくりまつり」に関わる子ども・学生・地域社会という三者における「発達」の姿でもあった。

キーワード：発達 学生教育 主体形成 地域貢献 持続可能な発展 地域の自立

はじめに

子どもたちに対し、地域の伝承的な遊びやものづくりの文化・楽しさに触れ、具体的な体験を通じて多くの文化を獲得して欲しいという思いから、「因幡・伯耆の手づくりまつり」（以下「因幡の手づくりまつり」）は1997年より開始された¹⁾。第11回目の開催となる2007年、中心市街地の地元商店街と協働することで、地域住民のものづくりへの関心を高め、この手づくりまつりを通じた地域の活性化に繋がる期待を込め、商店街での開催に向けて取り組んだ²⁾。

近年、大学・短期大学の大学機関には、従来の教育・研究に加えて、地域社会へ貢献することが「第三の使命」として要求されている³⁾。また、2006年12月に改正された教育基本法においては、第7条で「大学教育」についての条項が新設され、「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うと

ともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」と位置づけられた。法改正そのものの是非については別とし、大学機関の「社会の発展に寄与する」という役割について検討するならば、地域貢献に関わる活動の在り様が一定段階で吟味されなければならない。

そこで本稿では、「第11回因幡の手づくりまつり」を例に、そこで確認されてきた子ども・学生・地域社会という三者における「発達」の姿について論じる。

1. 現代の子どもが抱える発達課題

(1) 子どもの発達の危機

1970年代、保育・教育界では「子どもの手がムシ歯になっている」という表現で、子どもの手の不器用さを危惧する時期があった。「ナイフで鉛筆を削

れない」「包丁でリングの皮がむけない」など、文明の進化や家庭の子どもに対するかかわり方が影響し、子どもの間から「巧みな手」が消え、不器用な子どもが増えている姿がそこにはあった⁴⁾。このような問題意識から、1973年に民間研究団体として「子どもの遊びと手の労働研究会」が教育関係者を中心に結成された。以来30余年が過ぎたが、子どもの手の不器用さの問題は解消されておらず、心の問題も加わり、いっそう複雑さが増している。その例が、子どもによる相次いだ刃物を使った殺傷事件であり、大人側の対処として「刃物狩り」「ナイフ狩り」と称した動きが見られ、子どもから切削道具が遠ざけられている。

このことについて、土井康作は「それは、対処療法にすぎませんし、むしろ逆効果」と指摘し、「ナイフが悪いのではなく、それを使う実体験が余にも少ないことこそが問題なのです」と論じている。また、「ものを切ったり、誤って自分の手を切ったりする経験があまりにも少なく、「具体的な体験から、その後の取り扱い方が想像でき」、「想像力のある豊かな心は、このような実体験から生まれる」と、心と体験（経験）の重要性を関連付けている⁵⁾。

(2) いわゆる「気になる子ども」の姿

近年、LD(学習障害)・ADHD(注意欠陥多動性障害)・高機能自閉症等、軽度の「発達障害」を抱える子どもたちが注目されている。いずれも知的障害はないが中枢神経系の問題等で、学習や生活上の困難さを呈し、支援を要する子どもたちである。保育所・幼稚園においては子どもが発達期でもあるため、医師による診断が付けにくいケースも存在するが、子どもがおかれた環境面の作用から、LD等と類似した姿を持っていることも考えられる。そこで、発達障害やその疑いがある子どもを総称し、育ち・発達の遅れが「気になる子ども」と表現している。手の不器用な子どもがすべて「気になる子ども」に含まれるわけではないが、発達障害を抱える子どもに手の不器用さが見られることは多い。

例えば、ハサミで紙を切るという行為で考えると、①紙を切るという目的、②手にしたハサミを上下に動かして切るという行動、③紙に線が引かれてそれに沿って切る際、線を注視して線にそってハサミを動かす、④ハサミの刃で隠れた部分の切れ方を想像する、など複雑な情報処理がそこでは要求される。よって、紙に描かれた線に沿って切るということは、線から反れていないか、反れている場合はどのように修正するかなど、最終的に切り終えた後の姿をイメージし、それに向かって忠実に実行するということを、ハサミを動かしながら行っているわけである。しかし、発達障害の場合、注意力やワーキングメモリ、プランニングやモニタリングなどの困難さが指摘されており、脳の発達や中枢神経系の問題がその原因として存在する。一方、粗大運動・微細運動のパフォーマンスに困難さを見せる発達性協調運動障害においても、微細運動における手の巧緻性の問題が指摘されている⁶⁾。つまり、発達障害の子どもの場合は認知や行動面の困難さから生じる不器用さであるため、単なる実体験の不足だけでは語ることができない。

(3) 子どもの内面に注目して

先の土井の指摘や発達障害を例とした「気になる子ども」の不器用さを踏まえて検討すると、現代の子どもたちに不足しているのは実体験そのものと、実体験を通じて得られる内面への働きかけであることが考えられる。

子どもが抱く興味・関心に対し、親は「あぶない」という一言で道具やそれを使った行動を避けてきた。保育所・幼稚園においても、生命の安全を前面に、子どもの転倒や落下を恐れて「雲梯^{うんてい}」や「のぼり棒」といった“危険”な遊具の使用を廃し、園内の物的環境の安全性が最優先された。これらにより、子どもは沸き立つ欲求を削がれ、重力の抵抗に向かう遊びからも遠ざけられ、心と身体に影響を及ぼしていることは想像に難くない。発達障害の子どもに対するかかわりにおいても、子どもが抱える困難さ

に対する無理解から出来ない事を責め、子どもが自己評価を低くし自己肯定感が高められないなど、二次障害の問題も指摘されている⁷⁾。

よって、現代の子どもたちに必要とされるのは、実体験を通じて得られる達成感や成就感といったものであり、体験活動と両輪の軸として与えられる必要がある。「因幡の手づくりまつり」では、様々なものづくりを体験できるコーナーが設定され、時間の許す限り複数のものづくりを体験して回る子どもの姿が見られている。数十分単位から数時間かけて作品を製作するなど要する時間に幅はあるが、「何分以内で製作する」というようには求めている。そのため、焦燥感に掻き立てられることなく、試行錯誤は含みつつも必要に応じて学生スタッフの援助を受け、自らの手でものづくりを全うすることができる。そこには、まさに製作物の完成イメージに心をときめかせ、納得いくまで取り組むという子どもの姿が存在している。

子どもの発達の危機を憂慮する中で、今一度、心と体験の視点から保育・教育の在り方を考えていくことが重要になるだろう。

2. スタッフとして関わる学生の発達

(1) 準備過程を学生教育として位置づける

既に別稿で論じたように、「因幡の手づくりまつり」では、その準備過程を学生教育の一環として捉え、特に学生の主体形成に注目してきた⁸⁾。

手づくりまつりでは、子どもたちに向けてのものづくり体験のコーナーが用意されるが、スタッフの学生は講師の役を担う地域の職人のもとを訪れ、製作の事前トレーニングを実施する。スタッフ学生は、担当するコーナーによって、1名で担当する場合や複数名でグループを組むものと違いがある。職人のもとを訪れるため、電話での挨拶やトレーニングの日時を相互のスケジュールをもとに調整するなど、ここで学生の社会生活スキルが試されている。やり取りの出来如何によって、講師と学生の間で形成さ

れる人間関係が、手づくりまつり当日の運営にも影響が生じるのである。また、事前に経験することにより、作業の工程や製作時の段取りなどを確認するわけだが、あわせて「どこの手順が難しいか」「どのようにしたら、年齢段階に合わせて子どもはやり易いか」など、工夫を施すことが可能にもなる。

とりわけ、担当する学生が複数の大学機関にまたがる場合、他大学の文化や普段とは違う学生の雰囲気に触れることで、大きな刺激を受けるという学生間交流も存在している。

(2) 学生の発達課題として

上記のように、「因幡の手づくりまつり」に学生教育の視点を見出そうとしたのは、現代の大学生が抱える様々な困難さや、求められる人材の姿を踏まえてのことである。

大学生の「コミュニケーション力」や「対人関係調整の力」などといった、社会生活スキルの獲得については、学生が就職する社会、とりわけ経済界からの要請でもある⁹⁾。このような社会生活スキルが求められるのは、現代の大学生に欠けるもしくは弱い力としても理解されるが、これらの背景を掘り下げて検討する必要がある。

結論としては、先の子ども期における心と実体験の関係を引き継ぐものであり、今に生じた問題ではないということである。つまり、達成感や成就感を味わうことなく、自己形成に歪みを抱えた状態で青年期を過ごしているということである。「第二の誕生」(J・J・ルソー)と称される青年期は、言い換えれば「自分くずしから自分づくり」を行う時期である。自己の存在意義や集団や社会における役割を認識し、社会の形成者として「学校から社会へ」移行するわけだが、自己肯定感を高められずに青年期が延長しているケースも存在する。このような「モラトリアムの拡大」が学生の社会への移行を遅れさせ、NEET(Not in Education, Employment or Training)に代表される若者の社会問題が叫ばれるようになった。

「因幡の手づくりまつり」に関わることにより、学生は社会生活スキルの意味を実感し、また集団の中での自己の役割を認識していく。特に、子どもを相手として製作の工夫を考えることを通して、実際に生の反応を目の当たりにすることで、やりがいを感じ自己肯定感を高めていることが確認されてきた¹⁰⁾。

以上のように、青年期における学生の発達課題を踏まえ、主体形成に着目した学生教育の取組みを、地域貢献・地域交流の活動で実施することの意義は大きいだろう¹¹⁾。

3. 地域社会の発達・発展

(1) 地域の課題を踏まえて

「因幡の手づくりまつり」は、従来大学キャンパスや地域の公共施設を会場として開催してきた。第11回は、地域の商店街を会場として準備を進めたが、開催場所を商店街とした背景には、大きく2点に整理される。

まず、第一は実行委員長の土井康作が述べたように、「子どもたちや親たちのものづくりの意識を高めるためには、目的とするものづくりに適した材料や道具がどこのお店で売られているかを知り、いつでも買いに出かけられるような地域の雰囲気づくりが必要」という点である¹²⁾。つまり、手づくりまつりのようなものづくりの催しが地域の商店街で開催されれば、子どもや親は材料や道具を取り扱っている商店を知ることができ、店主や職人にとっては「自分たちがもつ技の奥深さを子どもたちや親に見せる絶好の機会」になると考えたからである。

第二は、地方の商店街が抱える課題として、郊外の大店進出に押されて、いわゆる“シャッター通り”（商店の閉店・閉鎖により、シャッターが下ろされた空き店舗が目立つ様）と化している現実がある。鳥取県内も例外ではなく、中心市街地の活性化に向け、行政・民間が協働して進めている最中である。そこで、地域の商店街と協働で手づくりまつりを開催することにより、「地域住民のものづくりへ

の関心を高め、職人たちの相互の連携に寄与し、地域の活性化」を期待した。

(2) 地域の自立にむけて

2000年に施行された、いわゆる「地方分権一括法」を受け、国の機関委任事務が廃止され、多くは自治体の自治事務へと移った。鳥取県の場合、1999年に片山善博県知事（第1期1999年4月～2003年4月、第2期2003年4月～2007年4月）が誕生して以降、真の「地方自治」を推し進めるべく、「現場主義」「草の根主義」などのスタンスが県行政全体に浸透し、国からの地方の自立という意識が高まった。しかし、第2期片山県政が取組んだ、「住民自治」とも称せる市町村や県民の自立といった「地域の自立と再生」については、課題を残した形となっている¹³⁾。

仮に、中心市街地の活性化に関わる課題がある場合、住民自治の観点で考えるならば、「実際に地域社会で発生した特定の問題の解決へむけて、地域住民が主体となって責任ある政策を実現していくこと」¹⁴⁾である。商店街が抱える問題であれば、商店街の各店で構成される商店街組合などが主体となることとなり、地域（町内）が抱える問題であれば町内会が主体になることが考えられる。

「第11回因幡の手づくりまつり」に向けては、智頭街道商店街の主体的な関わりにより、地域を挙げた盛り上がりへと結びついた。さらに言えば、この輪の中に地域の公民館・学校・保育所なども主体的に加われば、その様相はさらに変わってくるだろう。まさに、地域社会にあるさまざまな機関・団体が、それぞれの役目を認識して役割を果たし、相互に連携を図っていくことこそ、地方自治における“Governance”（ガバナンス；共同統治）の視点と重なるのである。

(3) 持続可能な発展

「因幡の手づくりまつり」と中心市街地活性化に対する意味において、木俣信行は「中心市街地に期待されている役割を見直し、活性化対策の広がり

考えるきっかけ」として論じた¹⁵⁾。近年、「サステイナブル (Sustainable) 社会」として、「持続可能な」社会の創造が、とりわけ環境面との関わりから期待されている。中心市街地の持続可能な状態を検討するならば、各商店や商店街全体の在り様をその方向に位置づけなければならない。

既に述べたが、第11回の開催について土井が論じた第一の点である、「子どもたちや親たちのものづくりの意識を高めるためには、目的とするものづくりに適した材料や道具がどこのお店で売られているかを知り、いつでも買いに出かけられるような地域の雰囲気づくりが必要」ということこそ、手づくりまつりを通じた「持続可能な発展」の視点である。このような視点から、商店街に対する住民や商店街側がもつ期待を満たし、商店街全体の環境面を再検討していくことで、将来的に持続可能な状態を創造することが求められる。そのためにも、木俣がいう「中心市街地に期待されている役割」を的確に捉えることが重要となる。

結果として、「第11回因幡の手づくりまつり」は予定した商店街の会場での開催が困難となったが、当日までの間に行われた討議や準備、また各商店の特色を活かしたものづくりコーナーを独自に設けた動きから、確実に地元商店街の「エンパワーメント (empowerment) (=力づける) に貢献したといえよう¹⁶⁾。まさに、このエンパワーメントこそが「地域の自立」そのものである。

おわりに

地域における「因幡の手づくりまつり」という催しから、そこに集い・関わる人々の姿を「発達」という視点から論じた。“development”は「発達」の他に「発展」とも訳されるが、「地域づくりは人づくり」とも言われるように、地域の発展が地域を支える人材の育成にも繋がっていく。よって、手づくりまつりに参加した子ども・学生が、次世代の地域社会の担い手として、社会発展に貢献していくこ

とが期待されよう。本稿では十分に論じられなかったが、今後はこのような催しにおける「学び」の視点からの検討が残されているので、以後の課題としたい。

[追記] 本稿の検討材料とした、「因幡の手づくりまつり」実行委員会、智頭街道商店街振興組合、また後援をいただいた皆様に、記して感謝申し上げます。

《注》

- 1) 「因幡・伯耆の手づくりまつり」は、子どもの遊びと手の労働研究会鳥取支部の主催により、1997年より1年に1回開催されている。鳥取県東部地区での開催時には「因幡の手づくりまつり」、同中・西部地区での開催時には「伯耆の手づくりまつり」と称する。2004年5月22日の「第8回伯耆の手づくりまつり」(於：鳥取短期大学)以降、鳥取大学・鳥取短期大学・鳥取環境大学の学生・教職員が連携し、企画・運営・準備にあたっている。
- 2) 「第11回因幡の手づくりまつり」(2007年6月9日)は、鳥取市の智頭街道商店街振興組合と協働し、智頭街道商店街での開催に向けて準備を行った。しかし、悪天候のため、当日の開催は鳥取県立県民文化会館に移して実施された。
- 3) 中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」2005年1月。なお、大学の「第三の使命」と地域交流・地域貢献の在り様については、荒井優・池谷千恵・國本真吾・久山かおる・高橋千恵子「地域交流を通じた学生教育プログラムの検討—『くらし国際交流フェスティバル2006』の実践から—」『鳥取短期大学研究紀要』第55号、2007年、を参照のこと。
- 4) 須藤敏昭『遊びと労働の教育』青木書店、1978年。
- 5) 土井康作「地域の子育てとものづくり活動—子どもの遊びと手の労働研究会編『子どもの「手」を育てる』ミネルヴァ書房、pp.143-144、2007年。
- 6) 牛山道雄「発達性強調運動障害とは」柘植雅義

- 編『「特別支援教育」100問100答』教育開発研究所，2007年。
- 7) 前掲6)，近藤文里「ADHD」『キーワードブック障害児教育』クリエイツかもがわ，2005年，など。なお，マリアン・ヨンマンズは，協調運動が苦手な子どもの自己認知について論じており，本稿との関連で興味深い（「協調運動の苦手な子どもたちの自己認知」辻井正次・宮原資英編著『子どもの不器用さ—その影響と発達の援助—』ブレーン出版，1999年）。
- 8) 國本真吾・板倉一枝・塩野谷斉・土井康作「地域活動を通した学生の主体形成に関する研究—『第8回伯耆の手づくりまつり』アンケートから—」『鳥取短期大学研究紀要』第54号，2006年。
- 9) 前掲3) の荒井他論文。
- 10) 日本海テレビジョン放送「リアルニュース日本海」（リアル特集：もの作りで知る楽しさと生きる力），2007年6月11日放送。
- 11) このような観点から，文部科学省は2007年度から「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」を事業化し，独立行政法人日本学生支援機構に業務を委託して実施している。初年度は，大学・短期大学・高等専門学校より計272件の申請があり，70件の取組みを選定した。
- 12) 前掲5)，p.150。
- 13) 片山県政下で鳥取県庁内に設置された「改革・自立推進本部」（2003年4月～2007年4月）には，副知事をリーダーとする「地方分権推進」のプロジェクトチームが結成された。「地域・住民団体の自立に向けた意識改革とその取組みへの支援を行う」という住民自治を進める目標について，目標達成度は60%という評価であった（<http://www.pref.tottori.lg.jp/dd.aspx?menuid=6488>）。
- 14) 松野弘『地域社会形成の思想と論理—参加・協働・自治—』ミネルヴァ書房，p.185，2004年。
- 15) 木俣信行「鳥取市の中心市街地活性化問題と手づくり祭」因幡の手づくりまつり実行委員会ワークショップ，2007年5月31日。
- 16) 國本真吾「手づくりまつりは地域活性化の鍵」日本海新聞散歩道，2007年6月25日号。